

下子談義徳圃集

四

特
へ 遠3
1.857
4



門 遠 13
冊 1857
卷 4



下子漢議徳圃集卷之四



蝶足母名名義影の事



叶竹軒撰

酒八百薬乃長と一子。春令次是始る。
酒と百薬れ長と一子。春令と縮む。
春に柳あり。吸ふ柳のり。情じぐ。情る。
じぐ。後よ蝶足母名として。不沙酒

下子漢議徳圃集



氣乃拔子ぬきるをなく。のこほぐせ。終つひり
 けこの身みをましらわらわらあらる。藝つう乃のをふにたる
 成なりじまんず。大おほ軒いびをも智さり人多ひまある
 一ひとをうくよを忘れりらあき扱も
 くゆ一ひとをれめじ一ひとを愛をうる事
 うある。むしらりにゆや一を當乃の化け
 がおえ舞やと這こもとを是ハ所場の出いと

目め成なりすりくの撲あ扱さよらてまいけの
 碎こひえあらんと笑わふを。されば係か乃の如ごとく
 酒さきんで一夜ひと入いりてんまをば校けり流
 一ひとのゆめ成乃の也なり十と才さいり
 くれて今いまをうく氣乃のけりやうに成
 一ひとをましらわらあらる。やうれ後であらう
 と。才さいりくもまバの形かちつてましらゆくと。

三才圖會 卷之六

不川とあり。河津城多入く。故はまじ
 づとて扱ふことや。何が急に目が著て。
 洵を志も孫ぞ。抱坊寺（遠入のんで
 と洵めばくそや。せくすう同よ。惣門を
 少志のう事なすよ。若じくも葉所
 と扱くして。孫く川とや。あがが川く
 して来り。さうや。氣味さうくさ。

起あり川とれば白む形く人至とく
 てあさひひくらすねど。いやくことさ
 りある。扱もさ。小栗判官が靈魂なり。西坊
 に空りや。さね事ありと。云もて。は川
 て。さくぐさげ。波お。乃。用帳の事。成
 摺ひ出されて。一刀三礼乃。照天。外像と。孫
 の外。言お。て。恥。い。と。く。返く。

おのまうー ぐ 岡帳の事ども 成候ふま。
 あまうりま 柳は 田つう なるく 乃 理と けせ。
 其と 六十 六 那 此 晴 する と 柳 せ され 冷
 汗 目 ぐ さ め こ なる 海 ぐ 小 粟 皮 と 吐
 と 色 戸 熱 して 近年 乃 岡 帳 小 之 山 崎
 つ 若 ぐ け して 嘘 け ぐ べ 川 色 ぐ け 物 成
 か ざ り あり ぐ 寝 帳 乃 挑 燈 ぐ ぐ あり 喫 せ

成 戸 挑 燈 せ ぐ 打 け せ の も 多 け あり ぐ。
 岡 帳 乃 本 書 ぐ あり ぐ 船 せ け きて 能 け 岡
 帳 道 の せ 人 ぐ 先 せ たら 牛 せ あり
 の 寝 帳 せ 日 延 け せ ぐ ぬ 宿 中 け あり け
 坊 中 ぐ せ 知 せ あり せ け 寺 せ 毎 年 寝 帳
 あ せ せ 買 置 け 弘 法 大 師 乃 此 能 佛 せ 正
 宗 乃 刀 乃 け け 稀 け あり せ あり け け け 山

三言集 卷之四



賢菩薩弘法大師乃御化矣。其
 像。り。ふ。す。川。て。お。あ。つ。も。は。せ。さ。も。は。
 た。し。く。と。い。り。を。舞。つ。の。あ。つ。の。あ。つ。と。
 守。奉。さ。が。梅。乃。打。殺。さ。う。と。ま。ふ。さ。
 了。の。と。其。時。分。班。女。が。見。ら。れ。あ。つ。お。
 碎。り。ま。さ。ふ。よ。住。合。く。其。上。梅。若。れ。の。お。
 草。鞋。も。が。お。め。と。つ。あ。つ。あ。ま。り。人。成。

う。川。じ。け。あ。つ。と。住。く。と。性。右。も。武。う。
 下。流。乃。境。隅。田。河。系。れ。と。と。殊。清。ふ。や。名。う。
 ね。り。と。ふ。と。事。回。じ。初。鳥。お。が。お。ま。ふ。人。川。
 あり。や。あ。つ。や。と。源。ら。初。も。つ。と。淋。し。
 け。なる。風。情。く。く。と。思。ひ。つ。ま。に。今。は。梅。乃。
 境。乃。と。も。な。り。と。圍。い。ら。し。て。京。も。
 こ。流。して。志。ま。い。ぬ。ほ。の。お。れ。事。あり。ち。

三言集 卷之四

と河坊をよと。氣をひけてうらなな岡
 帳をみるとして。表をひくふ。談議和尙と名ぬ
 やうよ。河坊やも。芝居乃らうらうら
 出るやうに。談議僧が出らるまじ。ふら
 ぶる。あまに。こい。やうらうら。と下り
 めつきて。香爐と持して。あまらうら。女中の方
 紙尻目よ。ひひも。さうら。親紀の世話
 づ

ある事。相意よらうら。年考。底も
 めよ。河坊。あて。若い女中の側と。うら
 く。ありき。あつて。あつて。あつて。あつて
 すら。あつて。あつて。あつて。あつて
 ながさ。みん。あつて。あつて。あつて。あつて
 あり。あつて。あつて。あつて。あつて
 あり。あつて。あつて。あつて。あつて

乞ハをくーヤ遠とほひら。今いま附つを談議だんぎにを
佛ぶつ申まをりゝおんく。軍ぐん申まをよむろぐり佛ぶつ此
況ぢやう法ぽうすくなく。談だんく句くを乃の軍ぐんあり形かた
受うくよ扱あり。又また町道場ちやうだうぢやう过あ渡わ渡わ二に向むかよ
佛ぶつ申まを談だんじと。表あらわじとさぐりはして方かた焼やり
佛ぶつ書しよ講かう釈じやく明めいり。我われ經きやう記き。忠ちゆう臣しん花はな中ちゆうぐ。か
ん人ひとおして念ねん佛ぶつを。附つぐわあひをる乞

物ものはすらゆ人ひと聞きくまむが。望のぞみの晚ゆふハ款くわん討たうの
所ところ。蛇へび夷い渡わり。の場ぢやうは。海うみうりす。佛ぶつ
申まをよ。くりもせぬ。軍ぐん書しよのあ。中ちゆう一いつ
當あ世よもしくやも。落おし。影かげし。事ことと入い
し。うま。う。せ。安やすく。う。り。嫁よめと物もの
出い。一いつヤ。次つぎハ。得えし。ぬ。事こと。此こゝに。影かげ
出い。賞しょう出い。う。と。中ちゆう一いつ。こ。が。陽やうを。此こゝに。揚あり

場ばののゆゆ人ひと乃なりああののまますするる変とへへ空ゆる際ひまててああ
ららるるははななののててああののまますするる一いつつつ空あくくとと
イイヤヤ今い夜まのの元もともものの賞ういいせせんんどどららちちとと
安やすくくとと今い月げつ中ちゆう乃なりとと賞うささままめめひひ物ものをを
しし着きひひ麻あ呂ろははほほここよよををてて十じゅう枚まいのの條じょう物ぶつ
成なりたたののここままををめめとと云いへへどど粧しつるる若わかひひ所ところでで
とといい乃なりいいややらら荒あ涼らうよよあありりししてて何なんれれ方かた

ととららしし甲かあありりきき佛ぶつ檀だんままでで友とも摺ずりととかかささらら
ととしし色いろくくれれおおももいい思おもひひののここ。 經きん冊さく乃なり
方あ焼や成なりけけららすす。 誰たれかかままささららいいけけぬぬ
季きののああららむむれれ書かららしし。 ことこと。 自じ傳でんらら
ままののしし。 和わ尚しょう柳りゅう。 ことこと。 歌うた成なりままみみ
ままののしし。 人ひとととれれをを。 海うみのの音ね。 乃なりののまますするるははなな
ぐぐいいすすままのの化かをを首くびにに懸かけけてて。

らし事^下成^レひ出^レ。其^レ体^レ又^レ各^レ月^レ
 這^レ入^ル。佛^レ納^レ袋^トと賣^レけき。三十三所^ノ乃^レ内^レ焼^レ
 油^ノを^レの隠^レ石^トと^レあ^レよ。寝^レ所^レ此^レ之^レ的^レ成^レ氣^ト
 ち^レに焼^レ。骨^ノを^レの内^レに^レあ^レよ。疾^レ食^トと
 孫^ノを^レ食^レひ^レの物^トと^レ扱^レや^レう^レに食^レ一^ト
 今^ノ乃^レ此^レ事^ト成^レと^レあ^レら^レる^レ。古^レ家^ノ多^ク一^ト。
 允^レ秋^ノ氏^ノの肉^ノ食^トと志^ト玉^トと^レあ^レら^レる^レ。戒^トと^レた^レら^レる

五^ノハ一^ツあ^レる長^ノ命^ノの術^{アリ}あり。殺^レ生^ハは
 じ^レく^レひ。偷^レ盜^ハ刑^セら^レる。殺^レ婦^トハ僧^ノ侶^ト
 夫^ノを^レ事^スみ^レれど。代^レ妻^トと^レ扱^レその^レに
 限^レる^レ。自^レ妻^トと^レあ^レる^レ。天^ノ地^ノ乃^レ理^トと^レ持^レけ。
 子^ノ孫^ノ相^レ續^クの事^トハ胸^トより。婦^ノ乱^トと^レ好^レむ^レ
 夫^ノ亡^レ乃^レ一^根を^レり。身^ノを^レか^レが^レ好^レく^レう^レ。
 以^テ夫^ノで^レは^レな^レけ^レも^レど。酒^ハ元^ノ其^ノ身^ト成^レ教^ト

物氣とくひ脾胃とすくやよする乃
 能おもむきもいれむは荒飲よ及母也病
 と成り又ハ碎粒して人成あをめ身
 とせよあよらむとせむはきんて吞と
 すもばさるるまの肉舎ハ一止係表
 乃やうまむと骨髄皮肉或膜して
 突乃補ひよあはれみ穀は長生と事

とする仙家小と。是或新ど。以人肉
 とや。或老人むじうかくらに西國の
 ありしや。一向宗乃寺ありて中末
 門徒山家と。漢方とにある。小岩とやん
 以事小と。本寺へ出會するに例式
 して。宇と漢との席紙分て別産と山方
 乃僧と中よあむとあれども大うとハ

六七八十も及て有よ白字乃八紙書
 あり。漢くこにも。二年と越しころハ
 稀ふて大くこ十六七古案ころり小及
 ぬおくこれ僧一代おして漢くこの僧とハ二
 三代四五代もころるとの言説ふころり。
 是誠おもふよ。山方を骨不自由したま
 くおも干物垢物漢くこハ。漢くこに生骨

ころり困るゆぐあるに給もあしと。
 味さましくなり。来らるも氣誠けけて
 へんもハ人間乃男よ。何くど難大をくも。
 田舎と江戸表れとハ。格別毛をみとらひ。
 命の長短もあつ。江戸乃中おも骨店
 にも。病大にけ。但し英舎よ絶ころり。
 長命なる人稀ふをあれと。それと

外ひらにび炙食あきと對揚たいやうするはるの保たもたるを
 あるふや。史し成せい以もて。肉にく食じき長なが命いのちに規規ぎ範はんを
 はならりぐ。又また農のう種しゆ一いつ粥しやく午ご時じ一いつ飯はん乃
 事ことも夜のはより。物もの乃の六む斗とを。法ほふ中ちゆうに。湯たう
 期き乃のよる也。並な九く斗とも。湯たう中ちゆう乃の湯たう八はつ斗と
 著しやく六む斗とも。法ほふ中ちゆう乃の湯たう夜よ乃の九く斗とを。
 陰いん中ちゆうに。法ほふ中ちゆう乃の湯たう分ぶんに。食じき一いつ。陰いん分ぶんに。食じき

せせざる。是これ又また書しよ生せいの術を。とかく。庶あひ生しやう
 海かい度どのため。命いのち成せい室しつと。志しあらん。人ひと世よ坊ぼう
 ここちちを。僧そうを。僧そうに。控こうと。守まもりて。と。う。ま。ひ
 物もの喰くむ。ぐ。ば。好す織お成せい着ちやくして。る。り。は
 ぞ。く。ま。く。ま。よ。人ひと乃の時ときは。ら。ぐ。ら。と。さ。也。
 淨じやう經きやう大だい事じと。孝かう同どうに。げ。も。ぐ。あ。り。が
 た。と。念ねん佛ぶつ才さい一いつと。少せうと。あ。り。と。

三言義釋圖集

卷之四

十五

